

令和元年7月5日
農業革新支援センター
(農業振興課)

低温と日照不足に対する農作物の技術対策情報

I 低温に関する予報について

東北地方週間天気予報（令和元年7月5日10時37分仙台管区気象台発表 一部抜粋）によると、向こう一週間、前線や湿った空気の影響により曇りで、期間のはじめと終わりは雨の降る所がある。最高気温は平年並か平年より低く、最低気温は平年より低い日が多い予報となっている。

また、宮城県を対象とした週間天気予報及び2週間気温予報（7月5日11時更新）では、6日から14日にかけて平年より気温の低い日が続く見込みである。

下記の農作物の技術対策により、農作物の管理について指導願います。

II 農作物の技術対策

1 水稲

- (1) 7月1日現在の生育は、草丈が48.4cmで平年比98%、茎数が576本/m²で平年比102%、葉数が10.0枚で平年差+0.2枚、葉色が43.1で平年差+1.1となっている。葉数からみると、平年に比べ1日程度生育が進んでおり、間もなく幼穂形成期を迎えると見られる。
- (2) 幼穂形成期（出穂25日前）から減数分裂期（出穂15～10日前）までの低温時（平均気温20℃以下又は最低気温17℃以下）には、水深10cm前後に湛水して幼穂を保温し、障害不稔の発生を防止する（前歴深水かんがい法）。
- (3) 最も低温に弱い減数分裂期（幼穂長3～12cm）に低温に遭遇する恐れがあるときには、17～20cmの深水にし、幼穂の保温に努める。この水深が確保できない場合でも、可能な限り深水にすることにより、障害不稔の発生は軽減される。前歴深水かんがい法と減数分裂期の深水管理を組み合わせることにより、被害軽減効果はさらに大きくなる。
※深水管理を効率的に実施できるように、用水路の整備や畦畔の補強等を行うとともに、用水の確保が迅速にできるように、土地改良区や水利組合等と十分な連携を図ること。
- (4) 現在、県内で本田での葉いもちの発生は確認されていないが、箱処理剤や予防粒剤の効果が低下し始める時期なので、葉いもちの発生に注意し、発生が見られたら、茎葉処理剤で防除を実施する。また、穂いもちの予防粒剤を使用する場合は、適期を逃さないようにする。

2 大豆

明きよ等の排水対策が不十分で、降雨による停滞水のため生育が遅れているほ場が見られる。今後、低温・多湿によって立枯性病害などの発生が多くなるので、明きよの補修等を行い、降雨によるほ場の停滞水を排出し、根の健全化に努める。

3 野菜・花き共通

- (1) 排水不良等による生育障害が発生しやすいので、明きよ等の排水対策を講じておく。
- (2) 多湿で病害が発生しやすいため、初期防除に努める。
- (3) 施設内では、病害の発生を抑えるため、暖房機や循環扇を利用して送風や換気に努める。
- (4) 施設内では、梅雨空の晴れ間に強光と高温になると、急激に萎れて葉焼け等の障害を起こすことがあるので、遮光や換気を行って気温や葉温の低下を図る。

4 野菜

- (1) 果菜類では不良果実を早めに摘果し、樹勢の維持を図る。

5 花き

- (1) キク類は、白さび病、その他花きは灰色かび病等の防除を徹底し、品質低下を防ぐ。また、全般にアザミウマ類やアブラムシ類、ハダニ類の虫害の発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

6 果樹

- (1) 果実肥大が遅れているところ、着果量の多いところは、早急に摘果を進める。
- (2) 7月から8月にかけては、各樹種とも花芽分化期となる。来年の良質な花芽を作るには、樹冠内の光環境を整える必要がある。光の透過を妨げる徒長枝は夏期せん定により取り除くか、誘引などにより、樹冠内部まで十分な日照が当たるようにする。ただ、新梢停止期でもあり、特にリンゴでは、過度の夏期せん定は一度停止した新梢が再び伸張し始めるので、徒長枝切りは一度に実施しないで、7月から9月にかけて3回程度に分けて実施する。
- (3) 曇雨天の下では、リンゴの斑点落葉病、褐斑病、ナシの黒星病、黒斑病、共通して輪紋病、炭疽病などの病害の発生、まん延が懸念されるので、適切な防除に努める。

7 飼料作物

- (1) 雨水が停滞しやすいほ場では、明きょ等の排水対策を講じておく。
- (2) 浸冠水した場合は、早期の排水に努める。